

ケインズ理論の経験論的淵源

－ F. ベーコン、D. ヒュームの “哲学的遺伝子” －

鈴木 則稔*

Keynes as a Philosophical “Descendant” of Francis Bacon and David Hume

Noritoshi SUZUKI*

Abstract

J.M. Keynes, known as a pioneer of macroeconomics, is also a renowned philosopher. Francis Bacon, who was the Lord Chancellor of King James, is also a most famous empiricist philosopher, and Scotsman David Hume contributes much the British empiricism thoughts. And Maynard Keynes writes “The General theory” which might be influenced very much by the two Britishmen.

キーワード：Keynes, “Novum Organum”, “Human Nature”, Empiricism, Induction

0. はじめに

マクロ経済学の端緒を開いた J.M. ケインズの哲学的著作に『確率論』がある。この『確率論』を書いた20代から集大成『雇用・利子および貨幣の一般理論』を書いた50代にかけその思考は明らかに変遷した。自らそれを認めている¹⁾。ケインズは英国、大ブリテン及び北アイルランド連合王国の人間である。ここでは集大成『一般理論』への英国哲学の影響を、経済学の視点から見ることに意識を絞りたい。なお、ケインズの生涯にわたる哲学、その詳細と出典毎の解釈分析について

は、伊藤邦武(1999)や Bateman・Davis(1991)などが存在する²⁾。

本論文を含む一連の研究は、『雇用・利子および貨幣の一般理論』“The General Theory of Employment Interest and Money”とその前後を中心に、人名や重要概念に関する索引から英国の主な哲学者、思想家への言及あるいはその痕跡と思われる部分を探索することから始まる。どこにどのような形で影響があるか、その痕跡はあるか。それはどこか。

ケインズ自身『一般理論』最終章で、思想の重要性を「・ ・良かれ悪しかれ危険となる

* 筑波学院大学経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

ものは、既得権益ではなくて思想である。(塩野谷祐一訳)」と述べている³⁾。以下では、『一般理論』から“類比する”また“逆算的に想像”するなどして、どのような思想家、哲学の影響を如何に受けたのかが問題となる。

1. 英国哲学思想の流れとケインズ

1. 1. ケインズに影響を与えた人たち

若き日のケインズと晩年のケインズでは、思考様式も当然変化している。経済学が守備範囲の本論文では、当然集大成の経済学書が書かれた頃、という観点からの考察が中心になる。最大の関心対象である『一般理論』全部やその準備段階、発行後の学界人とのやり取り、『一般理論』に匹敵する規模の、ただしかなり若いときの著作である『確率論』の一部、その他『人物評伝』『説得論集』など、哲学、思想家に関する記述などの多い資料を主に参考にした。

英国哲学思想上の著名人はある程度知られているので、初めはケインズ全集(CW)のうちの重要巻の索引に出ている思想家名を探し、記述を確認し絞る作業を行った。

スコラ哲学以降で影響をケインズに与えている可能性のある人々を羅列してみる。トマス・モアとエラスムス(蘭)、オッカム、フランシス・ベーコン、ホブズ、デカルト(仏)、J. ロック、ライプニッツ(独)、G. バークリー、D. ヒューム、ベイズ、A. スミス、E. バーク、J. ベンサム、ジェームズ・ミル、J.S. スチュアート・ミル、J.N. ケインズ(父)、S. ジェヴォンズ、G.E. ムーア、B. ラッセル、L. ウィットゲンシュタイン、F. ラムジー。このほかに、自然科学系の人物 I. ニュートン、ラプラス(仏)、R. ボイル、C. ダーウィンなどの名がケインズ全集(CW)の索引にある⁴⁻⁶⁾。

1. 2. 人間の「本性」「知性」

この中で、F. ベーコンとヒュームを最も重要と考え、焦点を絞った。現段階での判断として『一般理論』の姿勢にはフランシス・ベーコンの影響を感じず⁷⁾。事実としてケインズはF. ベーコンを読み込んでいて、研究対象として『確率論』執筆でかなりのページを割いている⁸⁾。それは帰納法に関することなので、学問的姿勢、手法において強い影響を受けていると推測できる。ベーコン以前からケインズの生きた時代に近い功利主義までを通して見ると、結果的には、ケインズに手法的な意味や社会視覚という点で最も大きな影響を与えていたのはベーコンと、ベーコンの方法の問題点を指摘し発展させたヒュームだったのではないかと想像する。今回はヒュームを先に取り上げる。

2. 人間の本性と科学の限界

2. 1. 人間の思考の本質—ロックとヒューム

認識論あるいは、知覚の限界など、人間の思考とその対象についての諸問題を追求する“Human Nature”即ち人間本性論はロックを基点に、その後カントなどの哲学にも繋がることになる。政治哲学者でもあったジョン・ロックについて、ケインズはまず経済学すなわち『一般理論』の重要部分である「流動性選好説」の魁け、つまり現代貨幣需要理論の先駆的着想をロックの著作に見出し、『一般理論』で直接言及している⁹⁾。ロックの認識論、人間本性論はバークリーの知覚論である非物質論を生み、デイヴィッド・ヒュームの『人間本性論』へと繋がる¹⁰⁾。

この中でケインズが哲学的に強く関わったと見られるのはヒュームである。スコットランドの生んだ偉大な哲学者であるので、若い時期からその著作に接することは当然と言えるが、『確率論』での取り上げ方から、とく

に科学哲学での影響は大きかったと推測される。その認識論などの土台はロックによって作られたものだろうが、ヒュームの『人間本性論』の「知性篇」の記述を見ると、ケインズの哲学の師であったムーアの哲学の原型と見ても良い内容である。ムーアの講義を共に聞いたB. ラッセルによる現代の入門書「哲学入門」の大元がそこにあったであろうことがよく理解できる。

また、同じ『人間本性論』の「情念篇」で、物事を動かす主なものとしてヒュームは、人間の「理性」よりもむしろ「情念」の方に重きを置いたことで知られる。この姿勢は、丁度、経済学を、主流となっている数理モデル中心の、合理論つまり理性一辺倒で捉えてゆこうとする立場、現実にはありそうもない仮定や公理を土台に、数式での厳密さや論理的整合性を競う経済学の形式論理重視とは一線を画す、ケインズの立場つまり経済学を「モラル（精神の）・サイエンス」と捉える立場に近いものである。

マルチ文化人ヒュームは経済学説史では、重商主義者でかつ貨幣政策への言及でも知られている。『一般理論』にあるヒュームへの直接言及はまさにその部分であり、またそれだけである。ただ、より重要なのは、フランス・ベーコンがその活用を始めて明確に提唱した帰納法の問題点をヒュームが指摘し、それが科学哲学に大きな足跡を残しているということである¹¹⁾。ヒュームの帰納法への言及と言うのは、「この世の中は“斉一”か？」という問いかけである。

2. 2. 斉一性またはエルゴード性—ヒュームの指摘と帰納法—

ヒュームによる帰納法に関する指摘というのは、『一般理論』が“古典派”の前提とする公準として提示している、経済の“斉一性”、デヴィッドソン（2014）の表現によれば「エルゴード性（ergodicity）」となるが、

その前提の問題と丁度符合する¹²⁾。

ヒュームが指摘した帰納法の問題点というのは、繰り返し観察する事象を取り巻く条件に、斉一性があるかということだ。一方、古典派が無意識に仮定しているとケインズが指摘している事柄と言うのは、時間軸を通しての条件の不変性である。つまり「時系列的斉一性」と言うことができる。過去も未来も“変わらない”と言うことだ。

3. “General Theory”『一般理論』

3. 1. 『一般理論』の焦点

ケインズの集大成である、『一般理論』への知的影響源をさぐる試みを行っているわけだが、この書は“古典派”との“決別”宣言を最大の目的としている。今回は、経済学からではなく、哲学からの影響に焦点を絞っている¹³⁾。

『一般理論』序章は、今までと異なった新しいことを既存理論つまり古典派に成り代わり言う、という宣言文にあたる。同第二章「古典派の公準」で、批判する相手とする人たちの、拠って立つところを解説し、それが非現実的だと指摘する。さらに、その最大の原因として「セー法則（Say's Law）」を指摘する。そして、第三章で、その「セー法則」を逆転させた自らの「有効需要の原理（principle of effective demand）」を提案する。

この第三章までが第一篇・序論で、次に第二篇・「定義と概念」が来る。第四章「単位の選定」を経て、続く第五章で再び自らが古典派とは違った視点であることを示す新しいアプローチを提示する。表題は「産出量と雇用の決定因としての期待」である。

3. 2. 『販路法則』または『セー法則』とケインズの指摘

古典派批判において、批判手法上最も重視していたこと、それは「『セー法則』が、現

実には成立しない」こと、その強調である。この法則の真偽が結局、“非自発的失業”を説明できるか否かを分け、また不況の原因である貯蓄の過剰または支出の過少に関わる。

『セー法則』とは、フランスのジャン・バティスト・セーによって提唱され、原型は「生産物は生産物によって購買される」である。後、ジェームズ・ミルによって著名な「供給はそれ自らの需要を見出す」と解釈され直し、生産された財は必ず販路が見出せると言う『販路法則』となり、ケインズが言うようにリカードはじめ代表的古典派経済学者がこの法則を前提として議論を進めることになった。

この“法則”を巡っては、多様な解説があり、例えばケインズの貨幣理論に大きな影響を与えたホートレイは「主に非貨幣的なシステムにのみ適用可能」としている^{14, 15)}。ケインズ自身は『一般理論』の草稿から「すべての産出水準において、生産物の需要価格が全体としてその供給価格に等しい」という表現に書き換えている。“常時均衡”ということは完全雇用の阻害可能性をゼロにしていると主張する。つまり、仮にセー法則が成立すればその世界では、「多くの労働者が雇用され切らない段階で均衡してしまう不完全雇用均衡」は成立しない。ケインズはこの法則が現実を説明する障害になると言いたいのである。

3. 3. 時間の流れと“期待”

『一般理論』第五章は「産出量と雇用の決定因としての期待」である。ケインズが古典派の中心としていた当時の権威リカードは、『一般理論』第二章の注への引用にあるように、「・・・経済学は産業の生産物が、その生産に携わった諸階級の間いかに分配されるか、その分配法則に関する研究にほかなりません。・・・そこでの階級別の比率ならともかく、量についての研究は空理空論です。」

とっており¹⁶⁾、雇用や産出など、“量”が変化する状況というのは、古典派の視野上には無いとケインズは主張する。古典派の視野からはさらに遠かったことが、「期待」である。第五章冒頭でケインズは、企業、生産者が状況の刻々変化する中、いかに計画し、費用を負担し準備して生産し、どう出るかわからない消費者と向き合うかを語っている。「・・・彼はこのような期待を道案内とするほかない。」¹⁷⁾

つまり日々の産出量を生産者が期待に依拠して決めるという現実、経験を語っているのである。そこには当然、「短期の期待」「長期の期待」が介在するはずだと主張しているのだが、そんなアイデアは古典派にあったろうかともケインズは言いたいのであろう。

4. 『一般理論』との“類比”－ヒュームの考察、ベーコンの警句－

4. 1. 経験論の系譜 1－ヒューム－

ここでD. ヒュームが言う観念の“類比”を行ってみると、『一般理論』は、前後の経済学書とは全くその心底において異なる。これまで見たようにケインズの“警告”は序文や本編の諸々の文章に現れてはいるが、まさに事前の「経験」を生かさないと、それとは気がつかない。この『一般理論』と言う専門家向けの啓発本がいかに英国経験論の影響下にあるか、歴史の順とは逆になるが、ヒューム、ベーコンの順で示して行きたい。

ヒュームは「人間知性研究」¹⁸⁾ 第四章第一部「知性の作用に関する懐疑的概念」で、人間が行う推論には二種類あるとする。①数学のような“観念的關係”で直観と論証で確証可能なもの、と②“事実の問題”つまり前者のやり方では確証できないもの、この二つである。昨日まで起こっていた経験事実の連鎖「太陽が昇る」ことが、明日絶対確実に起るといふ命題は、理論的に証明可能かという

と、その方法はない。ヒュームはこの種類の問題解決方法が開拓されてこなかったと言う。同第四章で、

「現前する証言や記憶の記録を超越して、何らかの現実的存在および事実の問題について我々に確信を与えるこの証拠の本性が何であるか、……哲学のこの部分はこれまで……ほとんど開拓されることはなかった。」

また、その未開拓性ゆえ、この「案内も指導もない」小道を進む上では様々な「疑念や誤謬」も起こりうるが、それらはむしろ

「……好奇心を喚起し、またあらゆる推論と自由な探求にとっての毒素である例の無反省な信仰や安心感を破壊するという点で有益となることすらある。」

それ故、

「通常の哲学における欠陥の発見は、……決して落胆すべきことではなく、……さらに充実して満足のいく何かを試みることへの刺激になるであろう。」

結局、

「事実の問題に関するすべての推論は、原因と結果の関係に基づいているように思われる。……原因と結果は理性によってはなく経験によって発見されるというこの命題は、……容易に認められるであろう。」(以上、前掲同章)

と、現実の世界を理解するには、理性一辺倒では不可能で経験によるしかないことをヒュームは確認する。

事実の積み重ねから何かを引き出そうとするのは、論証つまり演繹法に対置される帰納法、つまり経験論の主たる武器であるが、この帰納法の正しさそれ自体は論証する方法が見つからない。不確実性を伴う現実を考察するには、しかし、時折不確実性をむき出しにする経験を用いざるをえない。ヒュームは帰納法のこの問題点或いは“限界”も強調している。ケインズも『確率論』では、ヒューム

のこの指摘などをとりあげ、帰納法に疑念を呈する存在である方を強調しているが、帰納法全体におけるヒュームの存在はやはり大きい。

4. 2. 事実を認識する役割としての『一般理論』

『一般理論』は“マクロ経済理論モデル”を提示した書として扱われている。しかし、ケインズの書き方を改めて確認してみると、理性による演繹や論証ではなく、あくまで、「経験的事実」が、既存の理論たる古典派の教義には適合しないこと、及びその原因を探るために書かれたものであることがわかる。『一般理論』の第一章冒頭から、

……古典派理論の想定する特殊な事例はいかに我々が現実に生活を営んでいる経済社会の実相を映すものではない。それ故古典派の教えを経験的事実に適用しようとするならば、その教えはあらゆる方向へ人を導き、悲惨な結果を招来することになるだろう。(『一般理論』間宮訳)

このように、経験的事実を確認した上で、その事実を既存のアイデアではない方法で、いかに認識するかを提示することが同書の役目であると宣告しているのである¹⁹⁾。

こう見てくると、“理論”とは名乗っているものの、従来型理論と経験的事実の峻別が強調されるなど、『一般理論』が強い経験論的性格を有することがわかる。

ケインズは経済学専門著作の中では、あまり下地の哲学的見地を顕わにしない。個人的な手紙や若い時期に書いた哲学書である『確率論』などは別として、ケインズ全集(CW)全体への索引を見ると、経済学書ではあまり哲学系の索引項目はない。ロック、ヒュームが貨幣論者つまり経済の論者として登場するだけである。しかし、『確率論』執筆の経緯やラッセル、ラムジー、ウィットゲンシュタインら哲学者との交流、また収集古書から

ヒュームの文献を発掘するなどの努力と成果、まさに経験的事実から推測すると、『一般理論』という経済学書であっても、哲学の影響が希薄であったとは考えられない。

5. 経験論の系譜2 — “ノヴム・オルガヌム”としての『一般理論』—

5. 1. ケインズにとってのフランシス・ベーコン

ケインズがベーコンの影響を強く受けていたかどうか最大の関心事であるが、その理由を列挙して見よう。

- ①『確率論』での記述内容
- ②『一般理論』におけるケインズ自らの“姿勢”表明
- ③古典“オースドックス”への挑戦
- ④似ている挑戦的表現

『確率論』では、明確にベーコンの哲学を高く評価している。第二十三章「帰納の歴史に関する若干の覚書」で、ケインズはベーコンを帰納法(induction) 帰納的推論のパイオニアとして一番にあげている。ケインズによれば帰納法理論家は少なく、ベーコン以下は、ヒューム、J.S. ミル、後はラプラス(仏)と経済学者でもあるS・ジェヴォンズくらいと言う。

本論文は、ベーコンとケインズ両者のまさに“類比”を行っているところだが、帰納法はこの「類比」から始まる。類比にも「論理」はあるのだが、ケインズは、

論理学の理論の歴史におけるベーコンの偉業は、彼こそが、科学的推論にとって組織的類比の重要性ならびに最も確固とした結論の組織的類比への依存を認めた最初の論理学者であったということにある・・・。(『確率論』佐藤訳 p.311、原書 p.299)

と評し、偉業つまり「ノヴム・オルガヌム」をして、「類比の方法を拡充し、かつ誤った

類比を避けるための組織的方法を明らかにすることに力を注ぐものである」と評価している。また、有名な“イドラ”の教訓は、「誤りの類比を避けるため」(同書上掲頁)のものであるとしている。そして、ケインズから見たベーコン最大の貢献は「ほとんど無限に多様な経験は究極的には有限個の自然法則から生じるという近代的概念を創始しかけていた」ことで「宇宙のすべての現象を限られた数の単純な組合せに還元できることが可能とする見解」が現代の研究者によって、「ベーコン体系の中心でかつ哲学への貢献」とされていることを紹介している²⁰⁾。

5. 2. “Novum Organum” “General Theory”

ケインズが哲学を研究していた時代の『確率論』よりずっとあとで書かれたのが『一般理論』である。当時は経済官僚、経済評論家の側面が強く、哲学への言及は僅少でもおかしくはない。また、著作全体として、経済書ではあまり哲学的知識を披瀝しない傾向があるので、ベーコンが直接『一般理論』に言及されるとは思えない。

しかし、“類比”を行うと、“ノヴム”『一般理論』両書はともに従前の学問に挑戦しているのでその表現は当然似て来る。“ノヴム”のアフォリズムにケインズの用いる“古典派”などの言葉を当てはめやすい構造になっている。共にそこにあるのは、権威と化した人間の手になる理屈への限りない不信感である。例を示そう。

アフォリズム10：自然の精細は、感覚および知性の精細に幾層倍にも勝っている。従って、人間のあの立派な省察や思弁や論争も的外れなものなのである。ただそれに気付く者が居合せないだけだ。

アフォリズム12：今使われている論理は真理の探究よりもむしろ(慣用的概念に基づく)誤謬を不動にし、固定することに効果がある。従って有用と言うよりむしろ有害であ

る。

アフォリズム17：一般的命題を造るときにも、概念を抽象する場合に劣らず恣意と迷誤が存する。しかも通俗的帰納法による根本原理の場合においてである。しかしはるかに甚だしいのは、推論式によって導出される一般命題および下級の命題である。

（“ノヴム・オルガヌム” 桂訳 p.72-p.74）

ベーコンは当時の権威すなわちスコラ哲学由来の学問に対する挑戦によって新しい地平を切り開こうとしたし、ケインズは“古典派”という権威への挑戦を行った。ベーコンからケインズまで350年ほど開きがあるが、各アフォリズムの目的語などを、『セー法則』や“古典派”などの用語、あるいはリカードという人名と入れ替えても、そのまま通用する場合が多い。あたかもケインズが発したかのような表現である。

6. むすびにかえて—経験論の子孫としてのケインズ—

演繹法中心のスコラ哲学系学問に対抗してベーコンは、観察する、実験するなど、つまり経験重視の立場を表明した。丁度同じ意見をケインズは『一般理論』初めに宣している。

経済的思考を理論実践両面で支配している古典派理論、・・古典派理論の公準が妥当するのは特殊な事例のみで一般的には妥当せず、その想定するのは・・極限状態で・・それは我々が現実に生活を営んでいる経済社会の実相を映すものではない。・・それゆえ古典派の教えを経験的事実に適用しようとする、・・悲惨な結果を招来するであろう。（間宮訳(上) 第一章一般理論 p.5）

ケインズは“ノヴム・オルガヌム”とヒュームの“本性論”に直接触発されて『一般理論』を書いたわけではない。しかし、『一般理論』の姿勢表明に関してはフランシス・ベーコン

のスタイルが最も影響していると想像できる。伝統的な古典派では何が起り、一方で、事実はどうあるか認識し、その事態にいかに対処すべきか考える。これは、“ノヴム・オルガヌム”でベーコンが訴えていた新しい方法を打ち立てようとしていたときの姿勢と相似形を為す。ケインズは英国経験論の申し子の存在である。ケインズ思考の最終段階である『一般理論』に対する影響、科学哲学的な下地を提供していたもの、それを“類比”すれば、そこにF.ベーコン、ヒュームが大きな役割を果たしていたと見るべきであろう。

注

- 1) 自由貿易への姿勢など、ケインズは変化をいとわない。松川周二（2011）参照。なお「状況が変われば私なら意見を変えるが、君はどうだ？」との発言については、記録がない。
- 2) 伊藤邦武（1999）は哲学者だが、社会科学全般の視点からの分析解説もあり、この分野の研究には最初に手にすべき基本書と言える。本研究でも最初に参考としたものである。
- 3) 『一般理論』第二十四章「結論的覚え書」最終段落から。なお、“思想”の部分を塩野谷九十九訳、間宮訳は「観念」と訳している。
- 4) ロックやヒュームは貨幣論や利子論の経済学者でもある。
- 5) 仏独などの思想家、数学者などからの影響もケインズは当然受けており、デカルト、ライプニッツ、（確率論における）ラプラスについての言及は各著作内に散見される。
- 6) ケインズの著作のうち『一般理論』は哲学者個人名への言及が少ない。哲学そのもの、哲学的な表現と見られる部分も、ケインズ全集（CW=Corrected Writings of JMK）全体から見てもかなり少ない方であると感じられる。
- 7) なお、ケインズの『貨幣論』“A Treatise on Money”も大著だが、対象からはずした。
- 8) 『確率論』佐藤訳 第23章 p.307-p.315。

- 9) 『一般理論』 間宮訳 (下) p.127参照。
- 10) ヒューム大槻訳 (1995)、ラッセル (1985) など参照。
- 11) 『確率論』 佐藤訳、第23章 p.257他。ヒュームの帰納法への貢献は他にもある。
- 12) エルゴード性は、複数種ある数値の時間系列が、時間平均と集合平均 (空間的平均と言う場合も) が一定である、つまり時間空間において“均質”であることを意味する。“確率過程 (stochastic process)” 用語で主に統計力学で応用される。古典派の公準を“エルゴード性”と表現したのは、デヴィッドソン (2014) p.53-p.59参照。より広くは“斉一性”と表現することになると考えられる。
- 13) 経済学と全く関係ないと言うわけではなく、主に「科学哲学」すなわち物事の追求方法として、演繹を用いるか、帰納を用いるかといったようなことが焦点になる。
- 14) ホートレイのケインズへの手紙は CW XIV p.32 参照。ケインズの『一般理論』草稿の表現は同書 p.371。
- 15) オスカー・ランゲ = Lange (1942) の解釈はよく取り上げられる。代表的なこのランゲの解釈は現在市販の中上級テキストで取り上げられている。
- 16) 第二章の注 (1) リカードからマルサスへの手紙。『一般理論』間宮訳 (上) を筆者が改変。
- 17) 『一般理論』間宮訳 (上) p.64。
- 18) ヒューム、齊藤・一ノ瀬訳 (2011) 参照。
- 19) 序文でも同趣旨のことが述べられているが、同時に政策に関しては「副次的なこと」とも言っている。
- 20) 『確率論』佐藤訳 p.314、原書 p.301-p.302。研究者とはエリス (Ellis)。

参考文献

ベーコン、フランシス 桂寿一訳「ノヴム・オルガム」—新機関—1996、岩波文庫。
 Bacon, Francis “The New Organ” edited by Lisa Jardine and Michael Silverthorne, 2000.

Cambridge Univ. Press, (Bacon Francis “NOVUM ORGANUM” 1620).

デヴィッドソン、ポール「マクミラン経済学者列伝 ケインズ」小谷野俊夫訳、一灯社、2014。
 伊藤邦武「ケインズの哲学」岩波書店、1999。

ケインズ, J.M. 「雇傭・利子および貨幣の一般理論」塩野谷九十九訳、東洋経済新報社、1974、(初刷1941)。同左改訂版、塩野谷祐一訳、東洋経済新報社、1995。

ケインズ, J.M. 「雇用、利子および貨幣の一般理論」(上) (下)、間宮陽介訳、岩波文庫145、岩波書店、2008。

Keynes John Maynard, “The General Theory of Employment, Interest and Money”, MacMillan and CO. 1936.

Keynes John Maynard, The Collected Writings (CW) of JOHN MAYNARD KEYNES Volume VII, X, XIV, XXX. Cambridge.

ケインズ, J.M. 「確率論」, ケインズ全集 8, 佐藤隆三訳, 2010, 東洋経済新報社。

ケインズ, J.M. 「人物評伝」熊谷尚夫、大野忠男訳、1970、岩波書店。(CW, X Essays in Biography)。

ケインズ, J.M. ケインズ全集 9 「説得論集」宮崎義一訳1981。東洋経済新報社。(CW, IX Bibliography and Index.)

Skidelsky Robert, “John Maynard Keynes: Volume 2: The Economist as Savior, 1920-1937” 1992. PENGUIN BOOKS.

寺中平治・大久保正健「イギリス哲学の基本問題」2005、研究社。

ヒューム、デヴィッド「人性論」(一) - 第一篇 知性について - 大槻春彦訳1995、岩波文庫
 Hume, David “A Treatise of Human Nature”。

ヒューム、デヴィッド「人間知性研究」- 付・人間本性論摘要 -、斎藤繁雄、一ノ瀬正樹訳、(新装版)、法政大学出版局、2011、(Hume, David “An Enquiry Concerning Human Understanding”)

Lange Oscar, “Say’s Law: A Restatement and

- Criticism”, in Lange et al. editors, “Studies in Mathematical Economics”, 1942.
- 松川周二「ケインズの貿易感の変遷」E. トッドほか『自由貿易という幻想』p.109-132 2011, 藤原書店.
- 日本イギリス哲学会 「イギリス哲学・思想事典」2007, 研究社.
- ラッセル, バートランド「哲学入門」中村秀吉訳 現代教養文庫50, 1985, 社会思想社.
- Russell, Bertland “The Problems of Philosophy” 1912, 7 Oxford Univ. Press.
- ロック, ジョン「知性の正しい導き方」下川潔訳, 2015. ちくま学芸文庫.
- Locke, John “Of the Conduct of the Understanding”.